



大学院だより

令和 4 年度大学院歯学研究科入学式

令和 4 年度東京歯科大学大学院歯学研究科入学式は、感染対策を十分に行った上で、令和 4 年 4 月 2 日(土)午前 10 時より、39 名の新入大学院生を迎えました。新入生の呼名紹介の後、井出吉信学長からの訓示をいただきました。まず、ここに入学した大学院生諸君には、今後の歯科界における指導者たる自覚を持つこと、教員としても研究者としても臨床家としても特に選ばれた者たちだということを意識してほしいと勇気づけをされました。また、ご自分の大学院生時代の経験をもとに、真摯に研究に取り組むことが将来の歯科医師人生にとって有意義であること、壁にぶつかることもあると思うが、その時はとにかく自分一人に悩まないで指導者や大学院関係者に相談すること、また、ここにいる大学院生の多くが Teaching assistant に登録すると思うが、学生からは師として手本とされるので、教育者としての心構えもしっかり持ってほしいなどのお話をされました。引き続いて齋藤淳大学院研究科長から全国的にも入学者が極めて多い東京歯科大学の大学院生として、さらにはお手本になる研究者としてのあり方に関する訓示がありました。その後、東京歯科大学同窓会澁谷國男会長よりご挨拶をいただき、さらに新入生を代表して銅冶賢吾大学院生(歯周病学講座)が宣誓し、入学式は終了しました。入学式終了後、福田謙一学生部長による研究の捏造、改ざん、盗用など問題行動による影響が如何なるものかなど、研究に取り組む上での倫理に関する講習会と大学院生活の注意点や履修に関するオリエンテーションが行われました。



訓示を述べられる井出吉信学長

令和4年度大学院新入生 学外総合セミナー開催

新型コロナ感染流行の煽りを受けて昨年、一昨年と中止を余儀なくされていた大学院新入生の学外総合セミナーが、3年ぶりに2022年5月26日（木）～28日（土）の2泊3日で、「御殿場高原ホテル・時の栖 Hotel Brush upにて行われました。比較的晴天の日が続き、富士山を望む地で穏やかに過ごすことができました。参加者は、新入大学院生38名と齋藤淳大学院研究科長、福田謙一大学院学生部長及び堂地一利大学院事務の大学院関係者の他、口腔科学研究センター山口朗客員教授、後藤多津子教授、上田貴之教授に同行していただきました。参加者は、本館7階に集合して抗原検査を実施し、全員の陰性を確認してからバスに乗車しました。



出発前の抗原検査、全員陰性で出発！



ホテルからの富士山の風景

お昼前に現地に到着し、昼食後、各大学院生の自己紹介が行われました。各々大学院に入学した動機や最近特に取り組んでいること、興味があることなど、しっかりと自己アピールをしていました。その後、山口朗客員教授が、ご自分の長い研究生生活の経験から、研究とは何か、大学院生は何をすべきか、研究者はどう生きるべきかなどとともに研究の楽しさについても、熱心に語られました。とても貴重なお話で、有意義な時間となりました。



各々が自己アピール、これより親睦のスタート！



研究者のあり方についての熱弁される山口先生と熱心に聴講する大学院新入生

続いて、上田貴之教授が、研究のデザインについてと研究に必要な統計学の基礎的なお話をされました。大学院生たちにとって、とてもわかりやすく、今後の自分の研究の遂行だけでなく、文献を読む上でも明日から役立つ内容でした。そして、応用編として「身近なCQを解決する研究を作ってみよう」というグループ学習の課題を提示していただきました。



入門的な統計学のお話とグループ学習の課題を提示する上田教授



会場である御殿場高原ホテル・時の栖 Hotel Brush up の看板の前で

夕食前に看板のあるホテル入口で記念撮影が行われ、夕食は少々のアルコールとともに懇親会が行われ、親睦を深めました。

第2日目は、恒例の英文学術雑誌に関する発表会があり、石川早紀大学院生、森心汰大学院生、銅冶賢吾大学院生、倉島竜哉大学院生の4名が優秀賞に選抜されました。



各々が抄読した英文の発表会、質問も活発であった。

午後からは、前日に課された「身近なCQを解決する研究を作ってみよう」という課題についての活発なグループ討論が行われました。グループによっては、深夜に至るまで活発に討論し、翌日の発表の準備を熱心に行なっていました。



「歯科治療に対する恐怖心の許容に個人差はあるにか」を議論



「タブレットの所持と学業成績が相関するか」を議論



「Ni-Ti ローターファイル VS 手用ファイル」を議論



「マスク社会において矯正科の初診率に変化は見られたのか」を議論



「5年次臨床実習は、診療区分別に評価が違うのか」を議論

第3日目は、グループごとの発表が行われ、「マスク社会において矯正科の初診率に変化は見られたのか」を発表したグループが優秀賞に選抜されました。どのグループも、説得力のある素晴らしいプレゼンでした。



「タブレットの所持と学業成績が相関するか」について熱く語る菊池大学院生



「歯科治療に対する恐怖心の許容に個人差はあるにか」について発表する秦大学院生

本セミナーの最後に、豊富な海外経験をお持ちの後藤多津子教授から、海外の大学院生や研究者として生きる歯科医師について、日本の大学院生と比較した大変興味深いお話がありました。これから研究者としてのスタートする大学院生にとって、とてもためになる素晴らしい講義でした。



海外の大学院生のお話をされる後藤教授

帰路のバスに乗車する前に、もう一度抗原検査を施行し全員が陰性であることを確認して出発しました。新入大学院生にとって、大変充実した3日間でありました。英文学術雑誌発表会において優秀賞に選抜された石川早紀大学院生、森心汰大学院生、銅冶賢吾大学院生、倉島竜哉大学院生の4名に本セミナーの感想記を書いていただきました。

大学院新入生学外総合セミナーを終えて

口腔腫瘍外科学講座 石川 早紀

今回、5月26日～28日にかけて開催された大学院新入生学外総合セミナーに参加させていただきました。セミナーでは山口朗客員教授、上田貴之教授、後藤多津子教授による講演、英文学術誌発表、提示された課題に対するグループ討議及び発表が行われました。山口先生には先生ご自身の大学院生時代から現在までの研究生活について講演いただき、これから始まる研究生活の1つの道筋を示していただいたように感じています。また、先生の大学院生時代から変わらぬ研究に対する熱意に圧倒され、今後行っていく研究に対し、さらに気持ち引き締まりました。上田先生には研究方法について講義していただき、まだ理解が浅く、身近でない研究方法について体系的に学ぶことが出来ました。後藤先生には海外での大学院の研究生活について講演していただき、海外の大学院生を取り巻く環境や熱意に大変刺激を受けました。また、今までは大学院で研究を行う上でどうしても臨床から離れる期間が生まれるという事に不安を覚えていましたが、先生のお話を聞いた後はむしろ大学院生活を終えた後の臨床が楽しみとなりました。

英文学術誌発表ではセミナー参加前から読み慣れない英語論文に悪戦苦闘しながらスライドを作成し、準備を行いました。発表当日は学会発表に準じて発表・質疑応答が行われ、発表の緊張が漂う中、質疑応答が盛んに行われていたことがとても印象に残っています。また普段接することの少ない分野を取り扱った他講座の大学院生の発表は新鮮で、大変勉強になり、スライドや発表方法も様々で、今後取り入れたいと考えています。

グループ討議では課題として臨床研究の研究デザインの作成が提示され、実際に研究テーマを決定し、デザイン作成を行うことで研究を実際に行う流れの理

解が深まると同時に、様々な観点からの影響を考慮しながら行う研究の難しさを実感しました。

日中の行程終了後の懇談会では普段交流のない他講座の大学院生とも交流でき、横のつながりを作る事ができ、楽しい思い出です。

この学外セミナーを通して大学院生活の開始を実感し、良いスタートがきれたと考えています。今回経験させていただいたことを今後の大学院生活に繋げていきたいです。

最後に、セミナー開催にご尽力頂きました大学院事務所および先生方、英文学術誌発表にあたり指導して下さいました口腔腫瘍外科学講座の先生方に感謝申し上げます。

2022年度 大学院学外総合セミナー

歯周病学講座 森 心汰

御殿場にて行われた大学院学外総合セミナーに参加させていただきました。今回は3年ぶりの対面形式にて開催していただき、講義や英文学術誌発表、グループディスカッションなど、有意義な時間を過ごさせていただきました。

英文学術誌の発表は事前に興味がある論文を選択しその論文内容の発表を行います。発表の準備では、論文を読むということに不慣れである中、必要な情報を抽出し、伝わりやすいようにまとめるという作業に苦難しました。論文の最初から最後まですべての情報をスライドに盛り込むのではなく、論文を理解し、要点をまとめる能力が求められ、さらには論文内の統計処理の理解や、スライドの構成、プレゼンテーションの方法などにも苦戦したことは、とても印象に残っています。

発表では、自分の所属講座以外のたくさんの講座の発表を聞くことができ、どれも非常に興味深い発表でした。また、自分も準備に時間を費やし、他人に伝えることの大変さを痛感していたので、その分同期の方のスライドの完成度の高さや、プレゼンテーションの上手さに驚かされました。引き込まれるような内容が多かった分、疑問点もたくさん生じ、積極的に質問をさせていただきました。質問が特に多い発表では、会場の雰囲気も活発になり、その後の議論が白熱しました。

グループディスカッションでは、テーマの決定、スライド作製、全員のテーマに対す

る理解が半日で求められました。今回の学外セミナーで初めて顔合わせをしたメンバーですが、役割分担をし、全員が積極的に参加することで活発な議論をすることができました。

講義では、研究に対する喜びや熱意、海外に目を向けた活動、先生方の歩んできた道をお聞きすることができ、研究者としての一歩目において高いモチベーションを得ることができました。山口客員教授の「予想外にやってくる研究のチャンスを逃さない」というお言葉や、後藤教授の講義内の「人生、塞翁が馬」というメッセージがとても心に残っています。自分が現在おかれている環境において、楽しいときも苦しいときも実直に研究に向き合い、巡ってきたチャンスをつかむという姿勢を持って大学院生活を送りたいと思いました。

今回対面での学外セミナーを行えたことは、今後同期の大学院生とともに講座の垣根を越えて切磋琢磨していくための重要な一歩目となりました。開催にむけて尽力してくださった齋藤研究科長をはじめ、関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

大学院学外セミナーに参加して

歯周病学講座 銅冶賢吾

学外セミナーは新型コロナウイルスの影響によりオンラインでの開催が続いておりましたが、本年度は大学院研究科長である齋藤敦教授のご尽力により、2年ぶりに対面での開催となりました。今回の学外セミナーでは英文学術誌の発表や先生方の講義、グループディスカッションなど、志を共にする仲間とともに、有意義な3日間を過ごすことができました。

英文学術誌の発表は事前に論文を選択し、その論文内容をスライドにまとめ発表を行います。発表の準備段階では、英語論文の読解、統計分析の解釈、スライドの構成や発表の仕方など初めて行うことが多く、連日講座の先輩方にご指導していただきました。当日の発表では、質問や意見が飛び交い、自分の専門分野外の幅広い知識を得ることができました。また自分の分野以外の内容でも真剣にメモをとる同期の姿を目の当たりにし、このような仲間が集まって学べることの喜びを感じました。

グループディスカッションでは、”身近な Clinical Question を解決する研究の作製”というテーマでグループに分かれて議論をしました。グループによって CQ は様々でしたが、どのグループも素晴らしい研究デザインを作製していました。年齢や出身大学も異なるメンバーですが、同じ志を持つ仲間であるということを改めて感じ、いい刺激を受けることができました。

山口朗客員教授の講義では、大学院生活を過ごすうえでの心構えや、研究に対する姿勢を学びました。また世界に目を向ける重要性や、孤立した研究者にならず様々な人と関わっていくべきというお話も心に残っています。最後に、この3日間で得たものは、これからの大学院生活において重要な礎になると思います。ここで集まった仲間とお互いを高めあいながら、充実した4年間を送っていきたいです。このような貴重な機会を与えていただき、ありがとうございました。

2022年5月26日 - 28日 御殿場 時之栖

生理学講座 倉島竜哉

今回の3日間の学外セミナーは、研究に対する思いを再認識する有意義な機会だった。1日目には山口朗先生と上田貴之先生の講演を拝聴した。研究の道を歩まれた山口先生の講演はとても貴重だった。特に印象的だったのは、研究を継続させるポイントとして、「研究費」、「研究を行う仲間」、「温かく見守ってくれる上司」を挙げていたことだ。私は生理学講座で自由に実験をやらせてもらい、データを先輩や教授とディスカッションできる環境にいる。そんな環境にいられることを幸せに感じ、これからの4年間を邁進していこうと決意した。上田先生の講演は、研究デザインや統計の重要性についてだった。研究には必ずバイアスがかかるものだ。バイアスを極力取り除き、残るバイアスを明確に示すことで、研究の透明性と信憑性を確保することが大切だと学んだ。2日目には英文発表とグループワークがあった。英文発表では、時間配分、質問への対応、専門外の人への内容の伝え方など、自分が発表する上でもっと勉強しなければならないスキルが浮き彫りになった。また、他の人の発表では、普段自分が読まない内容の論文や、自分の研究に生かせそうな論文の発表を聞け

て、とても興味深かった。研究は1人でやるのではなく、多種多様な分野の人と議論しながら行うべきだと再認識した。グループワークでは、自分たちでクリニカルクエスチョンを設定し、それに対する研究モデルを作った。研究で生じるバイアスを可及的に排除するためのサンプルの取り方や、データの解析方法などをチームで考えるのは楽しかった。3日目には後藤多津子先生の講演を拝聴した。後藤先生には、海外の大学院生・研究事情についてのお話をさせていただいた。海外の大学院は入学する条件が厳しく、研究者たちはとてもハングリーに研究しているそうだ。私も無駄な実験はないと信じて、毎日をハングリーにかつ楽しんで過ごしていきたい。また、最近は海外の学会への参加も許容されてきている。近い将来、自分のデータを国際学会で発表し、海外の研究者と議論し、そのハングリーさを肌で感じたい。大学院入学式に、齋藤淳先生から「東京歯科大学ひいては歯科界を牽引していけるような研究者になれるように」というお話があった。今回のセミナーでは小さな会議室でのディスカッションだったが、いつか同じメンバーで、大きな学会会場でディスカッションする日を夢見ている。

東京歯科大学大学院の新体制

新体制のスタートにあたって

2022年6月1日から大学院歯学研究科は新たな体制となりました。大学院研究科長、教務部長、学生部長そして事務部門からご挨拶申し上げます。

大学院研究科長 齋藤 淳



本年6月1日に東京歯科大学大学院歯学研究科長を拝命いたしました齋藤です。大学院としては2013年に学生部長を拝命し、その後教務部長を務め、この間に田崎雅和先生、櫻井薫先生そして矢島安朝先生と3名の素晴らしい研究科長にご指導をいただきました。研究科長は2期目となりますので、これまで以上に大学院における研究と教育の質の向上に力を注いでまいります。

大学院歯学研究科の目的は、歯学及び歯学に関連する学問の領域において、理論応用を教授かつ研究し、人類福祉の増進、延いては文化の進展に寄与するとともに、優れた研究指導者及び歯科医学研究に精通した高度専門職業人としての歯科医師を養成することにあります。この目的を達成するために、教職員のご支援をいただきながら、大学院教務部長、学生部長そして大学院生とともに邁進する所存です。

これからの大学院生の活躍に是非、注目していただければと思います。よろしくお願いいたします。

大学院研究科 教務部長 澁川義幸



本年6月1日付で東京歯科大学大学院歯学研究科 教務部長を拝命いたしました生理学講座の澁川義幸です。

私の大学院とのはじめの接点はいくつかの国立大学医学部の大学院生研究発表会に外部聴講生として参加したことでした。その会では、私と年齢のさほど変わらない大学院生達による高度な研究に大変驚きました。加えて発表に対する大学院生同士の「口角飛沫」さながらのディスカッションには圧倒された記憶があります。

一方で、グローバルに活躍する博士の養成を柱とした「グローバル化社会の大学院教育」及び「新時代の大学院教育」を踏まえた、大学院教育の一層の充実・強化、今後の大学院教育の改革の方向性が、文部科学省から示されています。本学大学院においても、教職員の皆様ならびに齋藤大学院研究科長、福田学生部長のご指導をいただきながら、現状に満足することなく、ますます高度な研究、講座や分野を超えた密な研究ネットワークの構築、研究成果の積極的な社会発信、あるいは産学共同研究を含めた創薬・医療機器開発などにおいて知的財産が豊富に生まれるように、大学院生を支えながら大学院教育および研究指導に邁進する所存です。何卒よろしく願いいたします。

大学院研究科 学生部長 福田謙一



本年6月1日に再度学生部長を拝命いたしました福田です。2016年に学生部長を拝命し、今回で3期目になります。本大学院は、毎年40名近くが入学し、総勢で150名前後が在籍する全国的に見ても有数の大所帯です。ただ残念なことに、毎年、数名ですが退学者が出ています。研究への意欲を失ったり、研究の遂行に疲れたりといった理由が多いようです。学生部長として、できるだけ大学院生に寄り添い、研究の楽しさを知ってもらい、有意義な大学院生活を送っていただくように、応援していきたいと思っています。

齋藤大学院歯学研究科長を、澁川教務部長と共に支え、新体制の大学院をより良くするべく、頑張っていきたいと思っております。よろしく願い致します。

大学院研究科 事務部門 堂地一利

大学院事務室に所属しております堂地と申します。2014年10月から大学院事務を担当しております。当事務室は水道橋校舎本館7階 口腔科学研究センター内にありますが、大学院の事務業務は実質的に私1名で担当しております。また、私は勤続30年を超えた身であり、親子ほどの年齢差のある大学院生も多く在籍しています。そんな状況ではありますが、今後ともできる限り大学院生の側に立ち、彼らが充実した大学院学生生活を送っていただけるよう、サポートしていきたいと考えております。よろしく願いいたします。

編集後記

本年度も39名の大学院生が入学してきました。学長先生の訓示のごとく将来の歯科界を背負う研究者、教育者、臨床家を目指して、頑張っていたいただきたいものです。

新型コロナウイルス感染拡大予防のために、中止されていた大学院生の学外セミナーが3年ぶりに開催されました。英文発表会では、各々の発表のレベルが高く、またそれに対する議論もとても活発でした。グループ討論では、どのグループもとても斬新なテーマを発想したことに、驚きました。また、議論は熱心に取り組み、どのグループもプレゼン内容の完成度が高かったのにも驚きました。今後の彼らが楽しみです。

コロナが終息？まだ、なんとも言えませんが、そろそろ忘れないうちに以前の生活に戻りたいものです。(福田 記)